オリンピックと音楽

首都大学東京
舛本　直文

はじめに

オリンピックと音楽の結びつきには深いものがある。古代オリンピアの祭典競技の初日にラッパ手の競技が行われていたし、アテネで開催されていたパンアテナイ祭でもフルートや歌の競技が行われていた。近代オリンピックの開・閉会式では『オリンピック賛歌』が演奏され、大がかりな歌と踊りのショーが繰り広げられている。

それらの音楽は、開催国のローカルな音楽だけでなく、世界最高級の楽曲や演奏者達も登場するのが常である。

２００６年トリノ冬季大会開会式では、世界的なテノール歌手ルチアーノ・パヴァロッティが『誰も寝てはならぬ』を披露したが、それが口パクであったと非難された。前回の２０１２年ロンドン大会の開会式では元ビートルズのボーカリストであるポール・マッカートニーの演奏も話題を呼んだ。

１９６４年東京オリンピック大会を知る世代には、古関裕而作曲の名行進曲『オリンピック・マーチ』が今でも耳に残っているに違いない。当時、巷では三波春夫の『東京五輪音頭』が大流行し、日本各地の盆踊りでもこの曲がかかって皆が踊って盛り上がりを見せていた。流行曲の世界でも、１９７２年札幌冬季大会ではトワ・エ・モアの『虹と雪のバラード』が、１９９８年長野冬季大会ではＶ６の『輪になって踊ろう』が、それぞれ大ヒットしている。

本稿では、このようなオリンピックと音楽の歴史を振り返りながら、現代のオリンピックが抱えている問題にも触れてみたい。

オリンピック復興時の音楽

ピエール・ド・クーベルタンが19世紀末に古代オリンピアの祭典競技の復興を目指し、近代オリンピックを構想した際に、当時ヨーロッパで起きていたギリシャブームが影響していたことはよく知られている。彼は１８９２年に最初にオリンピック復興を表明するのであるが、残念ながら誰にも関心を持たれなかった。

そこで彼は、用意周到な準備をして次の機会に臨んだ。１８９４年、ソルボンヌ大学の大講堂でオリンピックの復興を再提案する際には、古代ギリシャの荘厳な雰囲気作りのために『アポロンの賛歌』という曲を用いたのである[1]。この曲は、紀元前１３８年に太陽と芸術の神アポロンに捧げたものと言われ、

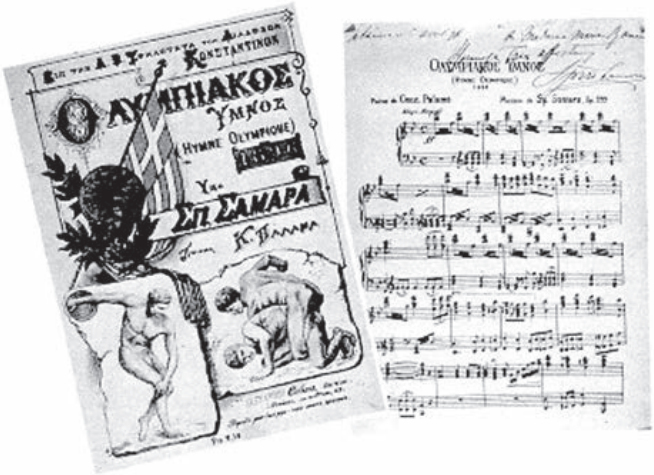
ギリシャのデルフィのアポロンの神殿の宝物庫の石壁に楽譜付きで刻まれていたものである。クーベルタンはそれを採譜させ、演奏させたとされる。デルフィの神殿は急峻なパルナソス山の中腹にあるが、「世界のへそ」を示す石もあり、当時は神のご託宣を聞くためにもギリシャ中から人々が集まってくるような重要な場所であった。

クーベルタンは、オリンピック復興を提案する際のムード作りとして、そのアポロン神への賛歌を演出に利用したわけである。なかなかのプロデューサーぶりである。

1896年第1回アテネ大会の時には、オリンピック復興を記念して『オリンピック賛歌』（英語：Olympic Hymn）が地元ギリシャで作成されている[2]。原曲はギリシャ人のコステス・パラマ作詞、スピロ・サマラ作曲、4月6日の開会式で歌われたとされる。しかしながら、その後譜面が行方不明となり、オリンピックのセレモニーで流れることもなく存在も忘れられていった。

しかし、1958年東京でIOC総会が開催される際に、ギリシャのIOC委員から日本の東龍太郎IOC委員（後の東京都知事）に楽譜が送られてきたのである。NHKはこの曲を古関裕而に依頼して新しくオーケストラ用に編曲し直し、総会の開会式でNHK交響楽団によって演奏披露した。当時のアベリー・ブランデージIOC会長以下、IOC委員達はこれに感激し、この後オリンピック大会やIOC総会で演奏されることとなった。この古関版には野上彰和訳のなかなか古風で壮大な歌詞がつけられている。

現在、オリンピックの各大会では、オリンピック旗の掲揚や降納時、あるいは本旗の入場時において、各国の翻訳版やギリシャ語版など、また演奏や独唱など様々な形でこの曲が使われている。



▲『オリンピック賛歌』の楽譜
（ポケット版オリンピック事典、p. 26）

オリンピックの芸術競技と音楽

オリンピックで芸術も競技され、メダルが授与され、大会期間中に展示・演奏されていたことはあまり知られていない。クーベルタンは心身の調和のとれた若者を育成するというオリンピズムの理念を達成するために、スポーツと共に芸術の競技も構想していたのである。

1912年ストックホルム大会から1948年ロンドン大会まで実施された「芸術競技」はミューズの五種競技とも呼ばれ、建築、彫刻、絵画、文学、音楽の5部門で競われ、題材が直接スポーツに関するものであった[3]。しかし、芸術の評価や競技は難しく、資金問題やアマチュア参加資格などの問題もあり、1948年ロンドン大会後は「芸術展示」に変更され、1964東京大会でも芸術展示として日本の古美術展示などが行われた。

1992年バルセロナ大会から「文化プログラム」と名を変え、芸術に限らず開催国の文化紹介や世界の文化交流の機会となっている。そこでも様々な音楽が用いられていることはいうまでもない。

「芸術競技」で行われた音楽部門は、音楽全般、声楽作曲、器楽作曲、オーケストラ作曲部門、ボーカル部門に分かれていたが、該

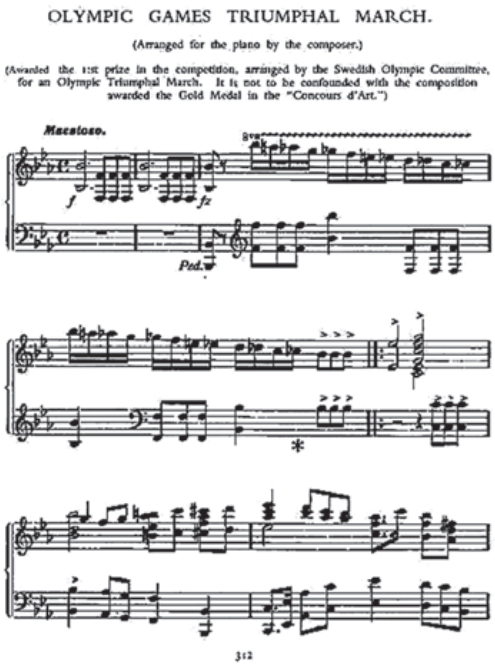
当者がいない大会も多くあった。１９１２年の最初のメダリストは音楽全般部門においてイタリアのリカルド・バーセレミーの『勝利の行進Triumphal March』ただ１点のみであった。器楽作曲部門とボーカル部門は１９４８年ロンドン大会だけで実施されている。

開・閉会式での音楽と文化プログラム

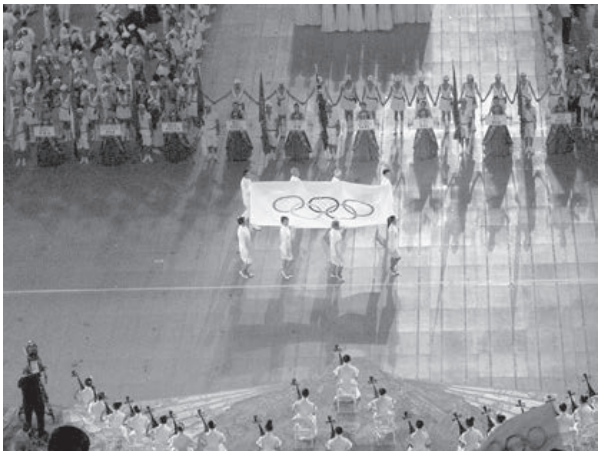
最近のオリンピックの開・閉会式は壮大なショーであり、文化プログラムの一環として音楽と踊りは欠かせない。中でも、入場行進曲とファンファーレが重要視されている。最近は選手の入場行進が長時間に及ぶため、１曲だけでカバーすることは難しいが、１９６４年東京大会では古関裕而作曲の『オリンピック・マーチ』が世界的にも有名である。オリンピック公式記録映画の名作『東京オリンピック』（市川崑監督、１９６５年）でも、10月10日午後２時、真っ青な青空の下、この行進曲に歩調を合わせて各国の選手団が入場するシーンが印象深く記録されている。古関はこの行進曲のラストに『君が代』の一節を用いているが、この名曲の誕生については、斉藤秀隆による紹介が詳しい。古関は、アジアで初めて、しかも日本で開催されるオリンピックであるため日本的な旋律によるマーチなどいろいろ考えたそうであるが、雅楽、邦楽、民謡など日本的なメロディーは行進曲に向かないことがわかり、そこでラストに『君が代』の一節を入れて日本開催を象徴的に表現したというのである[4]。古関にはマーチの名作や応援歌や校歌など多くの名作があるが、この『オリンピック・マーチ』ほど人気を博した曲はないであろう。筆者の知る限り、小・中学校の運動会でも最も良く使用されていた行進曲の一つであったといえるであろう。

その他、オリンピックの行進曲でよく引用されるのが、１９９６年アトランタ大会で披露されたアメリカのジョン・ウィリアムスの『英雄達の招集』である。これも名作の一つであり、シドニー大会でも演奏された。なお、オリンピックの各大会ではファンファーレも作曲されている。これは、クーベルタン時代からの伝統でもある。１９６４年東京大会では『オリンピック東京大会ファンファーレ』（今井光也作曲）が選ばれているが、これも印象に残る名作である。ジョン・ウィリアムスの１９８４年ロサンゼルス大会の『オリンピック・ファンファーレ』も名作の一つである[5]。

オリンピックの開会式では必ずピース・アピールソングが流れる。それはオリンピックが単なるスポーツの祭典だけでなく平和運動であるからである。平和のシンボルであるハ



▲1912年ストックホルム大会の芸術競技の音楽部門受賞作品楽譜の１枚目、公式報告書 p. 312



▲北京大会開会式の五輪旗入場のシーン

トの演出と共に、どのような音楽がそのシーンで使われるかも興味深い。１９６４年東京大会では、残念ながら音楽による演出はなかったが、最終聖火ランナーとして原爆投下の日に広島郊外で生まれた早稲田大学競走部１年生の坂井義則を起用し、放鳩によって平和メッセージを発信した。最近の開会式で、ジョン・レノンの『イマジン』が良く用いられるのも、その曲の持つ平和メッセージ性のためである。

最後に

総合芸術、あるいは一大ページェントとしてのオリンピックの開・閉会式であるが、最近はそこにも様々な問題が生じてきている。第１にコマーシャリズムの波である。ＩＯＣや組織委員会の放送機構はスポンサー獲得のために視聴率を上げようとエンターテインメント志向が甚だしい。演目にもサプライズ・プログラムを多くし、音楽でも誰を起用するかが、テレビの聴率アップのための最大の関心事となっている。テレビ局が特にそのサプライズ性を要求し、肝心のオリンピアン達への心身の調和のとれた教育というオリンピズムへの配慮は二の次になっている。

この傾向は民放のテレビカバーにも波及している。各局が競ってイメージソングなるものを作成し、自局のオリンピック放送カバーを印象づけようとする。人気グループが各局のテーマソングを歌い、一体テレビで何を伝えるのか、という肝心の視点が曖昧化してしまっている。教育運動や平和運動としてのオリンピズムとオリンピック運動というものがすっかり忘れ去られてしまっているのである。

第２には、開催国のナショナリティの発信に偏向しすぎていることである。最近は、自文化の世界発信が主眼目となり、異文化理解や国際的な文化・芸術の交流という側面が薄くなっている。

２０１２年ロンドン大会の音楽演出でもその傾向が著しかった。自国の音楽文化を世界に知ってもらおうとする姿勢は首肯できるが、それだけでは十分とは言えない。このグローバル時代、選手や観客は参加各国の様々な音楽文化に触れることも重要であり、それは特に子ども達にとって意義深いはずである。１９９８年長野冬季大会の開会式において、小沢征爾指揮で『地球交響曲』と題して、長野市と五大陸の都市を結んだ第九の大合唱のような演出が望まれるところである。

２０２０年東京のオリンピック・パラリンピック大会の開・閉会式では、文化の伝統とポップの調和も求められる必要があろう。日本の音楽発信でも伝統とポップの割合に関心を払いたい。当然、音楽の普遍性もアスリート達にも触れて欲しいし、日本の子ども達に世界最高級の音楽に触れる機会となって欲しい。オリンピック・パラリンピック教育に、文化プログラムと平和運動プログラムをブレンドした日本らしい発信をするためにも、音楽部門でもそのようなオリンピズムの普及に貢献して欲しいと思う次第である。

〈引用・参考文献〉

(1) 日本体育協会・日本オリンピック委員会（２０１２）日本体育協会・日本オリンピック委員会１００年史。Part I, p. 90.

(2) 日本オリンピック・アカデミー（２００８）ポケット版オリンピック事典。楽,p26.

(3) J. パリー・V. ギルギノフ・舛本（訳著）（２００８）オリンピックのすべて。大修館書店、p. 279.

(4) 福島民友新聞社　ウェブサイトは左記のとおり。
http://www.minyu-net.com/serial/koseki/1130/koseki39.html（20150421閲覧）

(5) W.K.Guegold (1996). 100 Years of Olympic Music. Golden Clef Publishing, p. 88.